

キューバ友好円卓会議設立10周年記念の集い

いま改めて語ろう、キューバの魅力

12月21日(土)
13:00~16:00

会場：日本青年館4階 宴会場「アルデ」

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町7-1 TEL 03-3475-2525 (代表)

最寄り駅はJR中央・総武線「千駄ヶ谷駅」「信濃町駅」、地下鉄銀座線「外苑前駅」

プログラム



☆来賓挨拶☆

マルコス・ロドリゲスさん 駐日キューバ大使(予定)

☆メインスピーチ☆

吉岡達也さん ピースポート共同代表
「フィデル・カストロの印象」

吉田太郎さん キューバ関連著書多数
「とっておきのキューバ取材こぼれ話」

☆他にショートスピーチ数人を予定

♪在日キューバ人ミュージシャンのライブ♪

ロランド・スペックさん Rolando Speck

ハバナ出身のバイオリニスト。ハバナの音楽学校で、年に3人しか突破できない難関バイオリンコースに入学し、7歳からバイオリンを始める。卒業後はマイケル・ブランコやチャランガバンド Orquesta melodias del 40 で第一ソリストをつとめるなど、クラシックからルンバ、ポップスまで幅広いジャンルで活躍。2012 年来日し、その感性と自由な音楽性で東京を中心に活躍中。

アレキサンダー・ラボルデ・パドロンさん

Alexander Laborde Padron

キューバで生まれ、5歳より歌の才能を発揮。14歳でギターを始める。ハバナの音楽学校で学んだ後、キューバ国立オペラの巨匠リナーレス氏と国立声楽コーラスを指揮するコリャド氏に指導を受け、その後21歳でプロデビュー。ヨーロッパでの活動後、アジアに拠点を移し活動。東京を中心に日本各地でライブを行う。

♪立食パーティー♪

6ページにキューバ友好円卓会議主催の10周年記念
キューバツアーのご案内を掲載しました。

キューバ友好円卓会議は設立10周年を迎えました

設立総会は2003年9月27日に東京の明治大学で開かれ、キューバとの友好を目指す首都圏コープ事業連合(現パルシステム生活協同組合連合会)、国際交流NGOピースポート、キューバに自転車を送る会、キューバに鍼を送る会などの関係者のほか、労働運動家、学者、ジャーナリストらが集まりました。

総会では、円卓会議の活動目標を「キューバとの友好促進」「キューバに関する情報交換と情報発信」とすることを確認し、これまで、キューバの政治、経済、外交、医療、教育、有機農業、エネルギー、音楽などをテーマとするフォーラム、シンポジウム、講演会を開催してきました。この間、キューバから医師やアレイダ・ゲバラさんを招いたり、「キューバ医療を見学する旅」を実施したりしました。

キューバを襲ったハリケーンで被災した人たちへのカンパ活動も続けてきました。

円卓会議が企画・主催した催しは毎回、多くの市民を集めてきました。これらの催しを通じてキューバに対する理解が深まり、日本・キューバ両国民間の友好が促進されたとみていいでしょう。

そこで、円卓会議は設立10周年を機に、これまでの活動を振り返り、さらにキューバとの友好機運を盛り上げようと、「設立10周年記念の集い」を開催することにしました。キューバ・ファンが一堂に会し、改めてキューバの魅力を語り尽くそうではありませんか。

参加費 3500円 ※当日、会場でお支払いただきます。

♪どなたでも参加できます。お友達を誘ってご参加ください♪

★申込締切 12月6日(金)

FAXかe-mailで下記へお申込みください。

★参加申込み キューバ友好円卓会議

〒157-0073 東京都世田谷区砧 8-15-14-101

FAX 03-3415-9292

e-mail : cuba.entaku.0803@gmail.com

気になるキューバ、その最新事情

報告 河内茂幸（翻訳家）

初夏の気配さえ感じられた去る6月29日、「気になるキューバ、その最新事情」と題して、キューバ友好円卓会議とアジア・アフリカ人民連帯日本委員会との共催による「キューバ友好フォーラム 2013」が開催されました。会場には、定員を超える59名の参加者があり、社会主義の理念を忘れず現在も独自の国づくりを続けるキューバに対する関心の高さが窺えました。岩垂弘キューバ友好円卓会議共同代表による主催者挨拶、エセキエル・ディアス・ルエダさん（キューバ共和国大使館経済・通商担当参事官）による来賓挨拶の後、早房長治さん（ジャーナリスト）と後藤政子さん（神奈川大学名誉教授）のお二人の講師による講演が行われました。

早房さんには、経済的には貧しい状態にありながらもキューバの充実した医療・教育制度の現状、アメリカとの関係改善の展望について、また、後藤さんには、革命以来半世紀にわたり革命の基本理念を維持してきたキューバが、制度転換による改革を実施するに至った背景やプロセス、改革の詳しい現状と今後の展望について語っていただきました。以下は、それぞれの要約です。



写真右から司会の二瓶裕子さん、共同代表・岩垂弘さん、キューバ大使館参事官のエセキエル・ディアス・ルエダさん

貧しいが、楽しい共産国・キューバ

早房長治（ジャーナリスト）



「カストロほどきれいな男はいないよ」

主だった共産国として中国、ヴェトナム、北朝鮮、キューバが挙げられますが、やっている政策はそれぞれ違い、中国は市場経済、北朝鮮は私の感想では戦前の天皇制とほとんど変わりがありません。しかし、キューバは数々の問題に直面しながら平等を保ち、格差が拡大しないための努力を行っています。私が会った人たちからは、共産国にありがちな幹部の腐敗した雰囲気は感じ取れませんでした。

一般の人に聞いてみたところ「フィデル・カストロほどきれいな男はいないよ」と言います。これを聞いてキューバが腐敗していない理由がわかりました。

孤独死のない医療大国

キューバの医療制度は、地区医院、総合診療所、総合病院・大学病院の三段階です。地区医院ではファミリー・ドクターと看護師、医療現場で働く医学生が全ての地区のお年寄りの健康状態を把握しており、お年寄りの相談に乗るので、日本のような孤独死はありませんし、危なくなれば総合病院に連れていきます。

医療費と教育は無料ですから、お年寄りは気軽に病院に行けますし、癌などの手術は総合病院・大学病院で受けることができます。5000あまりの地区医院と470の総合診療所、85の総合病院・大学病院が日本と同様の高齢化社会となったキューバを支えています。

医療制度が充実したキューバの高齢化はラテンアメリカ諸国でも飛びぬけており、全国で80万人が加入する老人クラブの合言葉は「120歳まで生きよう。それまで元気で暮らそう」で、道具は豊かではありませんがお年寄りを寝たきりにさせないためのリハビリや体操をはじめとする運動療法が行われるなど、国はお年寄りの面倒を良くみています。

貧しい国なので最新の医療機器は少なく、私が今年の訪問で内視鏡手術を受けたときの内視鏡は、私が7年前に食道がんの手術のため、検査の時に吞まされたものと同じ大きさでした。しかし医療水準は高く、癌の手術を

受ける際に私が学んだ医学知識からすると、手術におかしな所は一つもありませんでした。

キューバはラテンアメリカ諸国だけでなく、アジア・アフリカ諸国の医師を目指す貧しい若者たちを国費で招待してラテンアメリカ医科大学で学ばせています。約4500人の在学生の旅費、学費、生活費一切の面倒をみています。授業料が無料で生活費も支給されるという、本国では考えられない待遇を得た学生たちは日本の大学生と違って非常に熱心に授業を聞き、図書館やパソコンを使って自習しています。

キューバは外交政策として医者不足のラテンアメリカ諸国に医者を派遣し、ラテンアメリカの大きな病院にはキューバ人医師とラテンアメリカ医科大学で学んだ医師がいます。

いじめ防止に秘策あり

ハバナ市ブランジャ地区のエイブラハム・リンカーン小学校を訪れて朝礼と授業を見ましたが、朝礼は日本と大きく違って訪問者への挨拶だけでなく、歓迎の詩の朗読や見事なマンボの踊りもあり、やがてはすべての子どもが踊りだしました。こういう明るく、子どもたちの自主性を重んじた教育をやっていれば、いじめがなくなると思います。

キューバの小学校は25人以下の小学級制で、同じ学年が25人以上になった場合は別の学級を作ります。学校でのいじめについて質問したら、「そんなものはない」との答えが返ってきました。担任の先生は6年間の持ち上がりで、入学から卒業までの間、先生は生徒を細かく観察していますし、少人数学級なので先生は生徒と個人的に接触し、しょっちゅう家庭を訪問します。

また病気で長い間欠席する子供には、先生が出前授業を行い、何か問題が起きた時は校長も含めて教師全員が共通の問題として解決策を討議します。

学科では国語と算数重視で、高学年になると英語と歴史が加わります。歴史ではスペイン植民地時代、アメリカ支配時代についての近代史も取り上げられ、英語では英会話も行われています。またクラブ活動も活発です。

ただし校舎は古く、その上10台あるパソコンは部品不足で3台しか使えないのでパソコン教育は事実上行えません。

米国との和解は可能か

アメリカとの関係は不透明で、キューバ外務省幹部と話して、二期目を迎えたオバマ政権の対キューバ政策転換への希望を感じましたが、フロリダの亡命キューバ人の圧力は大きく、転換は簡単ではないと思います。

マイアミの亡命キューバ人による反キューバ破壊活動をあばいたことを理由に無実の罪を着せられ、釈放された一人を除いて、今も長年にわたりアメリカの獄中に捕らわれている「5人のヒーロー」の裁判を見てわかるよ

うに、安全保障がかかる問題では、アメリカは人権を無視する国なので、キューバが体制変革をしない限り、オバマが関係改善をたくてもできない状態が続くと思います。

しかし、ラテンアメリカではエクアドルのコレア、ボリビアのモラレス、ベネズエラではチャベス後継のマドゥーロが反米・非米政策をとり、キューバに対する経済封鎖の不当性を訴える国々も増えてきているので、その動きをうまくまとめることができれば、アメリカも考えざるを得なくなります。

経済を活性化させるためには、経済封鎖の解除は必須です。観光業への投資は行われていますが、工業への投資は行われていないので資金・物資不足と設備劣化に陥り、生産と生産効率は上がっていません。

その克服のためにはアメリカとの関係改善が不可欠で、関係改善に向けてラテンアメリカ諸国の協力が必要になると思います。

キューバ・改革の現状と展望

後藤政子 (神奈川大学名誉教授)



国営農場は大幅減少、協同組合農場が中心に

2011年4月の第6回共産党大会で「革命と党の経済社会政策基本方針」（以後「基本方針」）が決定され、抜本的な制度転換が始まりました。キューバでは「キューバ社会主義モデルの再構築」と言っています。その方が正確な表現だと思いますが、ここでは便宜上、「自由化」ないしは「改革」という言葉を使っておきます。

「基本方針」によれば、国家による各企業への経済コントロールは、融資や契約などを通じた間接的な形に移ります。

非農業部門では独立採算制を導入して自主性を拡大させた国営企業が中心となりますが、このほかに、外資企業や個人営業、協同組合を増やします。農業以外の部門で協同組合形態が導入されるのは、第6回大会が初めてです。

農業部門では国営農場は大幅に減少し、その役割は農業指導など、地域におけるパイロット農場的なものとなります。中心になるのはさまざまな形態の協同組合農場

です。国営農場を分割して形成されたUBPC（共同生産基礎単位）、農民が土地を持ち寄って共同で耕作するCAP（農業生産組合）、日本の農協に近いCCS（信用サービス協同組合）から成ります。国家統制色の強かったUBPCは、規制が緩和され、CAPIに似た協同組合に変わります。

この他に小農（革命前から存在するものと1959年の農地改革で土地を分与されたもの）と、政府が国有地を貸与する「借地農」があります。いま、この借地形態による小農形成が急ピッチで進んでいます。

社会サービスはすべての国民への平等なサービスから「弱者」保護中心の制度へと変わり、無償だったサービスも有料化されます。ただし、教育と医療の無償制度は今後も維持されます。

配給制度は2012年1月に完全に廃止となりました。すでに1990年代初めから配給は減少し、2000年代に入ると、配給では必要なカロリーの半分以下、3分の1くらいしか採れない状況になっていました。

政治改革も課題

第6回大会の後、徐々に、かつ段階的に政策が実施されています。法制化も進んでいます。

その中で注目されるものとして、まず、借地農への土地分配面積を最大67ヘクタールまでに拡大したことがあります。これにより牧場や樹園も経営できるようになり、かなりの規模の小農が誕生することになります。

また、非農業部門では3人集まれば協同組合が作れるようになり、個人営業や小農等へ国が融資する政策も決まりました。

このほか、住宅地や不動産、自動車の販売が許可されたことはご存知だと思います。また、所得税徴収や社会保障の有料化も決まりました。新移民法により財産を没収されずに外国に出ることができるようになりました。ただし、パスポートを取るためには100CUC（=100ドル）というかなり高額なお金がかかります。

一般には経済改革だけが知られていますが、政治改革も課題に上がっています。キューバは革命以来参加型民主主義を推進してきましたが、その形骸化への対策、決定過程の民主化や情報公開、ジャーナリズム改革に関する議論も始まっています。ラウルは、一党制は維持するとしていますが、いわゆる改革派のなかでは、一党制や議会制度の改革についても議論されていますので、将来は課題になるでしょう。

このほか、昨年1月の共産党総会で、政府要職の任期を、2期10年を限度とすることが決まりました。また、地方の企業や経済発展計画などは地方自治体の権限とされるなど、地方分権化も進んでいます。

食料自給率は20%

改革は進展していますが、すべて順風満帆というわけ

ではありません。

国営企業の整理統合が進み、これに伴い5年間に100万人の人員整理が予定されています。けれども12年末までに3分の1程度しか実施されていないなど、遅れています。労働者を路頭に迷わせることはなかなかできないということでしょう。

実は個人営業の拡大は、リストラされた労働者の受け入れ対策という面もあります。政府は2015年に民間労働者の割合を40%にするという目標をかかげており、個人営業者は1999年の99917人から2012年には397666人に増えました。しかし、増加分の66%が前職なし、つまり主婦や休業者等で、元国家公務員は18%にとどまっています。

個人営業は高額な収入が得られるとはいえ、高学歴者の多いキューバでは必ずしも魅力的な職業ではないということでしょう。

国営農業の農地面積は全体の3分の1程度にまで減り、協同組合農場や小農が中心となりました。いわゆる借地農は急増していますが（2008～2012年に計1万7400人、152万2300ヘクタール）、これがそのまま食糧生産の増加につながっているわけではありません。

農業は誰にでもすぐできるというわけではありませんし、国有の遊休地が分配されますので、マラブーという棘のある木が生い茂るなど、すぐさま農地に転換できるわけではありません。

キューバでは輸入額に占める食料と石油の割合が極めて大きく、財政を圧迫しています。ちなみに食料自給率は20%ほどです。そのため、「基本方針」では食糧生産および砂糖などの伝統的輸出農産物、医薬品、観光業などを軸とする経済発展戦略がたてられています。

抜本的制度転換に踏み切った理由

では、半世紀にわたり革命の基本理念を維持してきたキューバが、なぜ、いま、このような抜本的制度転換に踏み切ったかですが、それは、キューバが「経済悪化の悪循環」に陥り、革命存続の成果すら無に帰しかねない事態に至ったことによります。

アメリカの経済封鎖がキューバ経済に大きなマイナスの影響を与えていることはよく知られていますが、大事なのは、経済情勢の悪化は、このような外部条件のためだけではなく、いわゆる平等主義体制の限界のためでもあり、そこに部分的市場化の矛盾が加わって、「経済悪化の悪循環」を引き起こしていること、それを政府や国民が認識するに至ったことです。

ここで注目していただきたいのは、部分的市場化の矛盾です。前にも述べましたように、配給物資が減少し、自由市場で生活物資を手に入れなければなりません。価格が高いために職場で得る賃金ではまったく足りません。そのため「働いても意味がない」ことになり、労働意欲は低下し、ますます生産は低迷します。

一方、生活はしていかなければなりませんから、職場の物資を持ち出して家で使ったり、闇で売ったり……。一般労働者から管理職にいたるまで腐敗が横行しました。ガソリンの横流しを防ぐために、ガソリンスタンドに学生を動員したこともありました。

生活を維持するには外貨収入のあることが最大の強みになります。そのために有能な医者や教員や技術者などが観光業や個人営業に流れ、その結果、キューバが誇る教育や医療の現場でも、物資不足に加え、人材不足のために、質が劣化しました。もちろん、今でも立派な教員や医師はたくさんいますが……。

「革命は自壊し得る」と警告したカストロ

これに対し、フィデル・カストロは2005年11月、病気で引退する約半年前のことですが、ハバナ大学で学生を前に講演し、革命は「自壊し得る」と警告します。アメリカなど外部の力ではなく、内部から崩壊する可能性がある、というのです。

その上に立って、新しい社会の建設、すなわち、「21世紀の社会主義とはいかなるものか。これまで歴史上存在しなかった、まったく新しい社会主義とはどのようなものか、若い諸君に考えてほしい」と訴えます。これを機に知識人や政府内部でも体制改革をめぐる議論が始まりますが、フィデルは2010年11月のハバナ大学生との対話でも「5年間、何も議論・討論されなかった」と苦言を呈します。

基本的には「自由化」政策は続いてきたのですが、アメリカの制裁強化、エネルギー価格高騰や自然災害により経済情勢の悪化による財政の逼迫、部分的自由化に伴う汚職の蔓延などへの対策から、改革は一進一退を繰り返してきました。しかし、ついに、2005年のフィデルの警告に示されるように、矛盾は深刻化し、高い医療や教育水準、モラルを基礎とした社会など、キューバの誇る革命の成果すら綻び始めます。

こうして、第6回大会において、もはや覚悟して制度転換を進めない限り革命は崩壊するとして抜本的転換に踏み切ります。

進められている改革には「3つの理念」

では、現在の改革はどのような理念のもとで進められているのかということになりますが、改革については基本的に3つの考え方があります。

ひとつは、国家主義グループといわれるもので、革命の理念の維持のためには国家が大きな役割を果たすことが必要だとするものです。これを主張するのは政府の指導者や官僚ではないかと考える方がいるかもしれませんが、確かに一部にはそのような主張をする指導者や官僚がいますが、街の人々の中にも存在します。

第2は、社会主義市場経済グループともいわれるように、研究者

の中に多い考え方です。その内部にはさまざまな意見があり、経済が大きくなれば分配するパイも大きくなり、社会問題も解決するという人々もないわけではありません。このような考え方を取る人は国営企業の管理職にもいるとされています。

第3は、自主管理グループで、これは新しい社会主義形態として、労働者による自主管理を主張する人々です。まだ少数派ですが、第6回党大会の開催にあたり、このグループに検討の依頼があり、初めて非農業部門で協同組合形態が導入されることになりました。

全体の印象としては、経済を活性化するにはどのような政策、制度が必要か、という観点から政策が決定されているように見えます。

市場原理と革命理念のはざままで

第6回大会で抜本的な制度転換が決まったとはいえ、今後もキューバは市場原理の導入と革命理念の維持とのはざままで苦しみ続けるのではないかと思います。

新しい制度のもとで革命理念を維持できるかどうか。それは基本的には、マルティ主義の伝統・文化が維持されるかにかかっていると考えています。

また、キューバを考える場合には、「キューバの歴史の重み」を無視することができません。キューバ革命はスペインの植民地支配の歴史、その後のアメリカ支配の歴史、そのもとでの人々の苦しみや闘いの歴史などの上に成り立っています。

手前味噌で申し訳ありませんが、キューバの9年生（中学3年生）の歴史教科書を翻訳させていただいたことがあります（『キューバの歴史』明石書店）。

そこでは、カストロは歴史上のさまざまな人々の闘いの失敗から教訓を得て、革命を成功させた人物であり、キューバ革命の成功はそれらの闘いの蓄積の結果として描かれています。けっしてフィデルを神格化してはいません。

この教科書からは、キューバの歴史の重みがひしひしと感じられます。これがキューバの歴史観です。問題は、革命後世代が圧倒的多数となり、しかもグローバル化の時代にあつて、こうした「キューバ精神」といわれるものが維持されていくかどうか、という点にあるように思われます。



『キューバの歴史』 先史時代から現代まで

キューバ教育省 編
後藤政子 訳
明石書店 発行
4800円+税